

観光の世界知の教育的意味と価値

—— 場所、時空間、情報 ——

鳥尾 克二

前言

人間は生まれてから、人生の歩みに沿ってさまざまな世界認識を得ている。その場と手段は幼児期の家庭養育であり、青少年期の学校教育であり、就業期の組織内業務であり、人生の全期間を通して得られる多種多様の学びであり、経験や思考や信仰の所産である。われわれの世界知は、学校教育のみならず、生涯にわたり行われる Everyday Knowledge の自主的学びの集積知である。筆者は、観光の世界経験、世界知は、この自己教育のひとつの実践形態と捉えている。筆者は観光の原理的研究者である。観光とは何か、観光は人間にとって如何なる意味や価値を与えるか、観光の実践は如何にあるべきか等、観光とその産業を問い続けてきた。19世紀半ばトーマス・クックに始まる近代ツーリズムの源流は、トーマスの息子ジョンによって企業化され大英帝国のもとでやがて大河となった。この流れは、第2次世界大戦までには大西洋をはさむ新旧両大陸でさらに成長したが、大戦後の平和のおとずれとともに奔流となって欧米先進各国に共通に分流した。その分流は、次第に発展途上国を巻き込みつつさらに成長し、21世紀を迎えて世界的な大潮流となってさらに拡大している。なにが人間を観光に駆り立てるのか、そもそも人間にとって観光とはなにを意味するかが問われる。筆者の問いの原点はここにある。人間を観光に向かわせるなんらかの根源的な動機や、観光自体に対する意味あるいは価値の認識がなければ、観光がもたらす社会的、政治経済的現象の潮流がここまで巨大な姿を現出させるとは考え難いからである。

可愛い子には旅をさせよ。筆者は、観光の世界知は古来から人類の旅とともにあり、獲得される経験的な手触り (tactile) の、私にとっての世界知と考えている。観光という概念は、旅行者が世界や人間のあり様やありかたを理解する世界体験として、もともと無視し得ない根源的な意味を伏流させている。観光がもたらす世界知は、従来から、その意味や価値側面について特段研究されることはないが、われわれの世界認識や人間形成にとって、そもそも等閑視し得ない自己教育知であり続けていると考えるからである。観光の本質は世界体験および、その体験の意味と価値である。世界の時空間は、いきいきした経験

知を与える実習教室の現場として、教材的な側面を備え、常時、万人に、潜在的に開かれ存在している。

観光の教育的意味（意義）や価値とは何か。この問いの延長として、筆者は、観光を教育領域から捉えるため、2022年、京都大学大学院教育学研究科の研究生として在籍し、観光の教育的側面について研究した。研究テーマは、広瀬悠三の著作を参考文献として、観光の観点から捉えるカントの地理学教育、及び、地理学と観光の関連性へのアプローチである。筆者は、教育学や地理学の研究者ではないが、如上の経緯により、観光研究の一環として本論を投稿する次第である。本論はあくまでも、観光の観点で捉える観光の世界知の教育的側面についての論考である。第1章では観光の認識について過去提出した一連の拙論を集約し、概説する。第2章では観光と地理学について論考する。第3章では観光（情報）と地理学の世界知について、第4章では観光情報の意味（意義）と価値について論じる。

第1章 観光の世界像

筆者は、観光の原理的側面（認識、構造、価値、政策）の研究者である。論考にあたり、現象学および梅棹情報論から多くを学んできた。筆者の観光研究は、現象学的生活世界を实在根拠とし、梅棹情報論を認識根拠とする。旅と観光は経験を基盤とした世界と人間の理解について、抽象概念では得られない世界知をもたらす¹⁾。観光体験と観光情報の世界知はわれわれに如何なる意味と価値を与えるか、本章では観光の場所、時空間（景観）を通して、観光の世界像と観光情報（観光の世界知）について論考する。

人間は問うことをやめることができない。考える葦の問いは世界と人間に向かう。観光は思弁的行為ではない。体験行為である。筆者は、旅行を組み合わされた移動と滞在の時系列と捉え、観光は、旅行を手段として経験的に世界と人間を直接理解しようとする、旅行者の世界体験行為であると捉えている。

メルロ＝ポンティは以下を言明する。私とは、私の身体である。世界についての私の知識は、科学による知識であろうと世界に関する私自身の観察、もしくは経験からして得られるのであって、科学の考える世界の中に私を閉じ込めることはできない。認識はつねにこの世界について語る。これに対しては、いかなる科学的規定も抽象的、記号的、依存的である。これは、森林や、草原や河川がどのようなものであるかをわれわれに最初に教えた風景に対して、地理学が抽象的、記号的、依存的であるのと同様である（メルロ＝ポンティ、2009, 4-5, 253）。

筆者は、人間に定位した観光の意味（意義）と価値とは何かを問題とする。また、その理解の根拠を問う原理は、現象学が捉える経験する私の身体に現象する世界像と、梅棹情

報論の身体が捉える体験情報の世界像にあると考える。観光の本質は、私にとっての世界を知り、理解しようとする一人称の主観の世界体験行為である。人間は世界の一部であり、世界の中において世界を経験し、経験しつつ世界と自らを思惟し理解しようとする。本章では、観光の認識と観光の世界像について、日本国際観光学会論文集および自由論集に過去提出した拙論（鳥尾、2015, 2018, 2019, 2020, 2021, 2022, 2023）を以下、簡潔に集約する。

1-1. 観光の対象世界

地球世界は、並列する自然、社会、人文諸科学の言説を用いて理論的に解釈、記述され、われわれにとって概念知識が分節する体系（ことばと数理記号の世界像）として存在している。同時に、われわれが実際に体験できる経験可能な知覚対象世界として、常時、潜在的に存在している。観光の観点から捉える生活世界の時空間は、諸学によって集積されてきた自然と人間のさまざまな抽象的、記号的、依存的な概念知を脱領域的に横断している。観光の世界像は、現場の時空間において、概念知と体験知をコインの表裏として私に現象する。

現象学は生きられた空間、時間、世界についての報告である（メルロ＝ポンティ、2009, 1）。私たちは、身体のあるいま、ここから世界に関わっている。私たちによる世界についてのどのような認識もこの地点を出発点としており、回避することはできない。経験はすでに事実上私たちの誰もが手にしており私たちが私たちである限り、取り除くことができない。現象学は、一人称の観点から私たちの経験を探求することで世界を理解する。現象学における現象とは、経験と経験されるものという二重の意味をもっている。いま、ここで私にとって何かが経験（本論においては体験）されることは、何かが私にとって現れることである（吉川、2017, 7-15）。

観光の対象世界とは、地理的地球上の国家、都市、地域等の旅先で私にとって現れる他者の生活世界の自然的、歴史的、文化的な日常の一切、あるがままの現実を意味する。観光のパースペクティブ（視点、観光のまなざし）で捉える他者の生活世界は、旅行者が面する時空間の場所、景観として眼前にさまざまに展開し、事物・事象（万象）を有機的に含む全体として現象する。筆者は、人間を観光に向かわせる動機の力学は、世界を自らの実体験に問い、理解しようとする1人の旅行者（一人称の主観）の世界体験行為と考えている。われわれは観光の現場において、知識として集積してきた概念世界の意味や価値を自らの経験の当否に問う。旅はわれわれを世界の直接的な知覚体験に導き、観光は、観光のまなざしを与え、生きた世界知を生む。筆者は、観光の世界知は古来から人類の旅とともにあり、われわれの世界理解について無視し得ない根源的な意味と価値をもともと持ち続けていると考える。

旅を通して世界に投げかけるわれわれの観光のまなざしは、世界と人間を問おうとする

人間存在の深みに根ざしている。観光の世界知は、われわれの自己と世界理解を支える生の知識を、人生にもたらす。観光という概念は、軽い概念ではない。われわれの人生にとって、より深みのある意味（意義）や価値を潜在的に蔵している。自然は身体より古く、身体は科学より古い。観光の世界知は人間の旅とともに古い。観光概念は哲学的洗礼を要す。

1-2. 地理的地球世界と観光

図1は、観光資源としてわれわれの経験に与えられる地球世界を表現する。地理的地球世界は、自然と人間の営みの歴史の変遷を各国、諸都市の場所に刻み込んでいる。中間円は、場所に存在する事物・事象（万象）の有機的全体であり、概念的、知覚的表象として捉えられる生活世界とその情報形を示す。内円は、旅行業界においてツアー造成に使用されるLANDとしての生活世界を示す。LAND概念は、中間円内において、旅行事業が旅行商品を造成する素材（部品）として任意適宜に選択し、ツアーに組み込み、手配するホテル、レストラン、名所・旧跡、文化財等を表現する事業業界の概念用語である。旅行業界は他者の生活世界をLAND（旅行部品供給素材）として旅行商品を造成する。外円は、観光体験の場となる生活世界が展開する時空間（景観）を意味する。旅行事業に於いては、世界の生活世界の時空間はあるがままで常時、観光資源、LAND素材として潜在的に存在している。

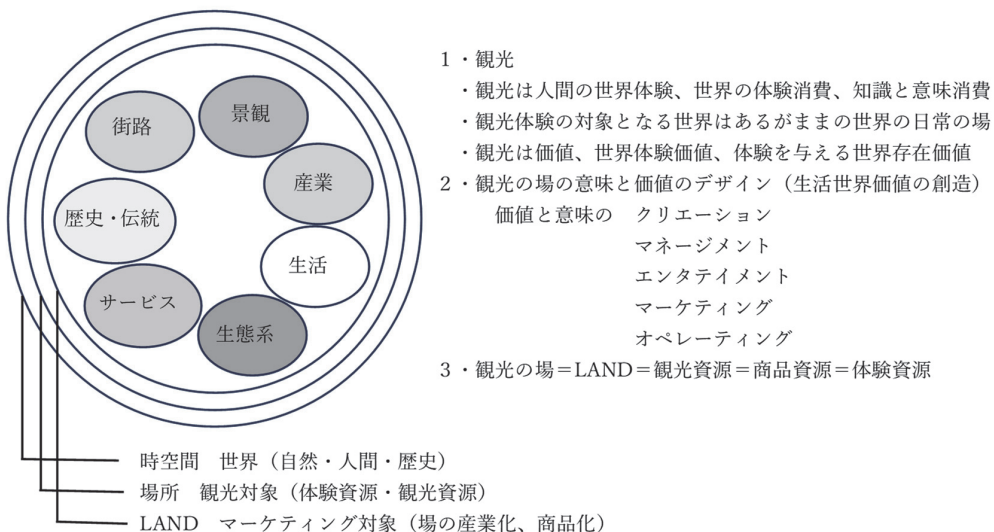


図1 観光の場のモデル

ショースタックのサービス分子モデル、山本正二の改良形を応用し作成。K. Torio 2008

観光は生活世界を対象とする。世界体験を与える現場は、地球世界の場所の時空間である。生活世界とは、私たちの眼前に時間的、空間的に広がり、変化のうちに私たちが日々を営む、あるがままの現実世界の日常を意味する。他者の生活世界は、私の生活世界の向

こうに存在するが、旅行を介して常に経験可能的に私の身体に接続している世界である。私と他者の生活世界は互いに相対的に存在する。私たちは、他者の生活世界を訪れてさまざまな対象に出会い、異文化を生きる人々の生の意味や価値の世界像を体験し、参考にして、自らの世界像を拡大・充実させようとする。観光の対象となる世界は、概念の世界像ではなく、われわれの身体に意味と価値を帯びた知覚体験をもたらす任意の他者の生活世界に他ならない。観光の時空間は、そこに含まれる事物や事象、住民の営みによって独自の意味を形成しながら、時々刻々変化し変容している動的な知覚空間である。観光は、いま、ここで、私にとって現れるその時点の世界の自然的、歴史的、人文的時空間とコンテンツをそのまま資源とする。

1-3. 観光の構造

図2は、観光の構造を示す。領域A、Cは図1のモデルの生活世界を表現する。それぞれの領域は相手に対し、Host（着地サイド）、Guest（発地サイド）として相互置換的に存在する。例示すれば、京都と東京、あるいは日本とアメリカの生活世界は、それぞれ相互に置換し得る観光資源対象として相対的に位置、存在する。領域Bにおいて、領域A、Cの日常は相手に対し、相対的に情報（概念知識）の観光資源として存在する。領域Dは旅行事業の領域である。旅行事業においては、領域A、Cの生活世界はLAND 素材として存在する。

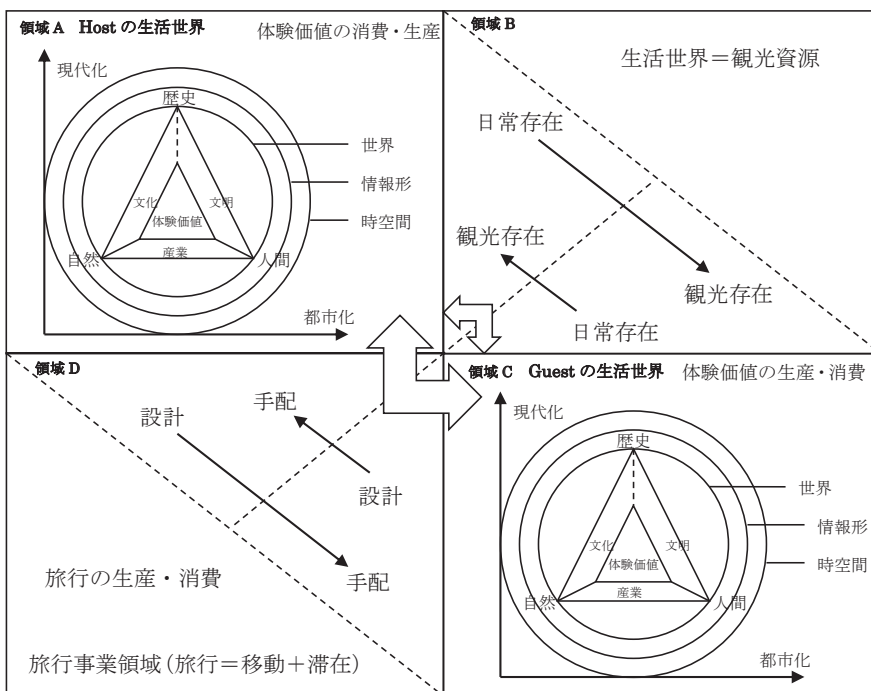


図2 観光の構造
K. Torio 2023 (2004 版、2008 版を修正)

観光の対象となる世界は、母なる自然において、地球世界の時間と空間内に置かれ、国家や都市、あるいは地域として存在する。他者の生活世界の価値の本質は、各国や地域社会の自然的、歴史的、文化的な日常存在の在り方の価値（well beingの価値）を意味する。私たちの生活世界は、日常の基盤であると同時に、他者の生活世界に対しては、互いに体験価値をもたらす観光資源として相対的（ゲストとホストの相互関係）に存在する。観光体験とは、主観に与えられる自他の生活世界の属性を知覚情報の付加価値として捉え、自ら表象する旅行者の情報の世界像理解に他ならない。

われわれが日常の生活世界において基本的な存在とみなすのは、感覚のレベルでの具体的個物である。われわれは、五感と一体になって事物を感覚している。われわれの心の活動についての記述の主体となるのは、1回限りの一生を生きる、固有名の個人であり、その個人が1回きりの人生や、彼が面する環境世界（観光の時空間）に価値的意味を追求し、それを日常言語で表現する（小林、1986, 119, 167）。身体が知覚する観光体験知は、言語を用いて概念化される手前の原的、生命的な感性（情動）のレベルの直覚知である。

情動が目指している内容は、知性によっては二次的にしか規定し得ない。したがってその内容は「無論理的」であり、これこそ価値という名で呼ばれているもののなのである。そうした価値には、快と不快との価値、生命的と精神的との価値（真と偽との価値、美と醜との価値、正と邪との価値）、そして最後に、愛憎という特殊な行為において目指される聖と俗との価値がある（メルロ＝ポンティ、1988, 37）。地理的世界の観光の時空間は、情動として知覚するこれらの私にとっての価値を与える。観光の体験価値の本質は、知性が言語化しようとする手前で感性が直覚する価値である。観光の時空間は、私が日常言語で表彰する世界理解の生きた学びの現場として、常時、潜在的に存在する。地理的地球世界の時空間は、私の1回限りの人生に意味と価値をもたらす実習教室である。

1-4. 観光の世界像

1-4-1. 観光の世界像－1

私は世界を目指し、世界を知覚する。身体は空間と時間に住む（メルロ＝ポンティ、2009, 17, 237）。観光は思弁的行為ではない。私が知覚する世界体験行為である。観光体験の世界は地理的場所として眼前に展開する。その場所は生態系、市街、ビーチ等の自然的、人文的、歴史的な地誌の変遷を景観や風景のうちに含みこむ時空間として私に現象する。場所の時空間は、私の身体が位置し、面している現場の現実体験として感覚される。感覚するということは、世界をわれわれの生活の行われる場所としてわれわれに現前せしめる、世界との生き生きした交信である。世界とは私が知覚する当のものである。世界は、まさに私が表象するもの以外のものではない（メルロ＝ポンティ、2009, 9, 17, 104）。

梅棹によれば、すべての存在それ自体が情報である。世界そのものが情報である。人間

の感覚は外界（世界）をさまざまな情報として受けとる。生（身体）の根源に情報が存在する。外界（世界）は、感覚器官をとおして生体内（身体）につねにもたらされ、感覚器官、脳神経系は常時外界（世界）を知覚の情報として捉えている。情報というのは、文字や言語をとおしてのみ伝達されるものではない（梅棹、1993, 57, 148, 149）。（世界）は物理的、現象的側面として客観的に存在すると同時に、個々の生が知覚し解読する情報の側面としても存在する。梅棹が用語使用する情報とは、人間に身体的に知覚され、生に解読をもたらす存在の捉え方の表現形式を意味する。梅棹の情報認識の最も重要な特徴は、世界の存在の一切を人間の生（知覚する私）に向かって発信される情報源存在として捉える情報の世界認識像にある。その意味で梅棹は、情報は著しく人間的なものとなる。人間の生の根源に情報が存在する、との認識を示す。筆者は、梅棹は、その観点から世界そのものを情報源と捉え、人間が知覚受信するこれらの存在の情報の側面の産業的価値や文明的意味について洞察を示しているものと考ええる。梅棹の洞察は、一貫して情報を新しい環境や資源とする情報の世界像認識である。世界は身体に現象する。観光の場では身体は現象を知覚体験情報として受信し、私が捉える世界像として表象する。現象学は現象の相のもとで世界を理解する（吉川、2017, 16）。世界は私たちが表象する情報以外のものではない。現象の相のもとで理解する観光の世界像（相）とは、身体が知覚受信する体験情報の世界像である。

梅棹の体験情報の世界像は、メルロ＝ポンティの身体論が表象する世界像を意味する。身体が知覚する当のモノの世界を、私たちは情報の世界像として受け取る。われわれは、現象の相を通して体験的に世界の自然を問い、人間社会を問い、双方の歴史を問うことによって人生をより豊かに生きようとする。人間は在る（isness）と同時に成ろう（suchness）とする自己教育的存在（being）である。旅行者は自らの観光経験を出発点として、身体（生）が知覚する現象の相のもとで見知らぬ世界を理解しようとする。観光は、体験をとおして世界を理解しようとする人間の普遍的行為である。観光の世界像とはまさに、いま、ここ、この私の身体が知覚、交信し、体験情報として表象する当のもの、地理的地球上の他者の生活世界の受信像以外のものではない。観光の世界像は、私に現象する相のもとで私が知覚し、日常言語で表象する、私にとっての知覚体験情報の世界像である。

1-4-2. 観光の世界像－2

存在するものはすべて、モノとして存在するか、意識として存在するか、いずれかであって中間はない（メルロ＝ポンティ、2009, 83）。観光の対象世界とは地理的地球世界である。地理的地球世界は物理的自然としてモノであり、言語や数理法則等、ことばや記号によって表象される概念として意識である。物理的自然は、まず感覚に、知覚性質とともに現れる、その世界は、われわれの五感を介して、身体感覚と一体になって、感覚される世界で

ある（小林、1986, 25, 167）。

身体が知覚する体験知は、言語を用いて概念化される手前の原始的、生命的な感性の直覚知である。現象学は知覚に与えられる生活世界への帰還を説く。観光の世界像は、われわれが旅行先世界で面し、知覚的に表象する感覚世界の像である。数理的理論情報や概念知識の氾濫は、客観情報化手前の生きられる世界を抽象的アミカケの世界像に導いている。経験する身体は私たちが私たちである限り取り除くことはできない。現象学による世界の探求は、経験を事実上の出発点とする（吉川、2017, 13）。それゆえ、観光の世界経験（主観表象）は万人に開かれている。観光の世界知は、世界を抽象的に理解するのではなく、われわれの生きた体験に与えられる世界像を取り戻し、世界を学び直すわれわれ自身の自己教育の実践である。観光体験はわれわれに知覚情報として現象し、あるがままの私にとっての世界の現存を示す。現象学は、完全な哲学的自覚に到達する以前から、手法あるいは様式として、すでに実行され、認められ、動きとして現存していたのだ（メルロ＝ポンティ、2009, 2）。観光の世界体験は、私にとっての現象学として身近に存在する。

第2章 観光と地理学——自然と人文の場所、空間、時空間——

世界に直接通じる水路としての眼という概念に含意されているのは、書物による知識に対する直接的経験の優位性である（エリック・リード、1993, 236）。観光の世界像とは、客観処理された言語や数理を用いて抽象的に表現される概念世界ではない。京都一般やヨーロッパ一般といったものは、概念以外のどこにも存在しない。観光の世界像は、1人の旅行者の主観が大きな書物として表象する地理的地球世界の現場の現実の実体験像である。

筆者は、エドワード・レルフやイーファー・トゥアンの地理学が捉える場所や空間は、観光との相関を含意しているのではないかと考える。地理学、とりわけ人文地理学は、研究分野や対象について観光との共通接点を有しているのではないか。筆者は地理学の研究者ではない。本章においては、観光の視点から場所、空間、景観等の概念について、地理学の知見を参考として考察する。観光の実体験時空間は、地理学の空間知との乖離を埋める境界に位置すると考える。本章では、エドワード・レルフ、イーファー・トゥアンの著作に加え、竹中克行編著の著作を参考として、地理学の知見を観光の観点（パースペクティブ）から捉えることとしたい。

2-1. 場所と観光のパースペクティブ

『場所の現象学』の訳者によれば、エドワード・レルフは1970年以来、一貫して地理的経験の現象学的基盤について考察を続けてきた。訳者は以下を述べる。レルフの考える地理学は、経験から離れて方法論が分離されうのようなものではない。レルフにとって重要

なのは他人の知覚や行動や方法ではなく、自分自身がその場で何を見、考えるかが問題なのだ（あとがき）。レルフによれば、地理学は第1に、意味で満たされた世界の奥深い直接経験であり、人間存在の紛れもない基盤である。この直接経験の場所は、形式的な地理学の言葉によっては探求され得ない。場所は、人間の秩序と自然の秩序との融合体であり、私たちが直接経験する世界の意義深い中心、意図的に与えられた意味の総合体である。場所の経験は、部屋の一部から大陸全体までのスケールを持ちうるけれども、どのスケールにおいても場所は全体性を持つ実体である（レルフ、1999, 34-36, 294）。

筆者の観点からは、このレルフの言説は、図1に示す観光資源としてのあるがままの地理的世界、その時空間に現象する意味で満たされた万象（事物・事象）の有機的総合体を意味する。観光の世界像は、知覚される場所の全体性の情報としてその時空間に現象する。観光の観点からは、観光の場所とは、レルフの言う自然地理学、人文地理学の形式的な地理学の言葉によっては探求されないスケールを直接実体験する時空間を意味する。

トゥアンによれば、経験は感情と思考とが複合したものである。感情と思考は、経験という連続体の端と端とに位置しているが、どちらもものごとを知る方法なのである。世界を経験するとは学ぶことであり、与えられたものに働きかけて、そこから何か（認識・理解・実践）を生み出すことである。与えられたものそれ自体は知りようがない。われわれが知ることができるのは、経験によって構成された、つまり感情と思考とによって作り出された現実の世界なのである。情動は、高度な内容の思考をも含めた人間のすべての経験に彩りを与えている。場所は価値が凝結したものである（トゥアン、1993, 21-24, 29）。

観光は人間の場所（時空間）経験の一つである。筆者の観点では、旅行者の身体が経験する観光の場所の世界体験は、理性がもたらす概念知と感性が知覚する体験知の交錯する両端を備える。観光の場所では、旅行者は旅行先の他者の生活世界の経験を、知覚情報として表象し、思惟し、体験情報として理解しようとする。その場所は、私の感情と思考によって意味と彩りを伴い、作り出された私の世界知の生成臨界現場を意味する。

地理学は学問的知識から人間存在のあり様まで広く対象に取り込むことを避けて通れない。そこには、科学に身を任せて意味の源泉とのふれあいを忘れることによって、そのような緊張を解こうとする地理学が実際に生じる可能性がある。多くの現象学者が明らかにしてきたのは、まさにこのふれあいの喪失と、知識と実体験との乖離である（レルフ、1999, 35-36）。観光動機はこの乖離の断層に発生する。地理学（自然地理学、人文地理学）と観光は地理的地球世界の探求と理解について学的言説と直接経験の両端に位置する。前者は現実を客観説明し、後者は感覚するが、どちらも世界を知る方法である。観光の現場の時空間は、自然と人間によって蓄積されてきたさまざまな営みの一切を含む。観光は、場所においてわれわれの概念知を直接経験する。地理学の概念知と観光の体験知は世界知の両端である。1回限りの人生に意義あるふれあいの場所の時空間を求めて身体は世界に旅立つ。

2-2. 空間と観光のパースペクティブ

空間は、視覚対象ではなく、思惟対象となる（メルロ＝ポンティ、1988, 15）。最も直接的な意識の形は知覚空間である。（その空間は）各個人が知覚し直面する自己中心的内容と意味を持つ空間である。知覚空間は大地、海、空といった空間や、人工的に造られた空間との直接の感情的な出会いの空間である。空間の様々な形態は直接経験と抽象的思考とを両端とする連続した範囲の中に存在する（レルフ、1999, 42, 47）。地理学は空間を切り口とすることで人間世界に関する考察を深めてきた。時空間が切り離すことのできない統一体として存在することは、改めて言うまでもない（竹中、2015, 5）。

観光の時空間は私が知覚する場所の時空間である。眼前の時空間は、あるがままの日常の生きた現実相として現象する万象の有機的全体であって、個々の現象の足し算の総和ではない。観光の観点から捉える知覚時空間は、自然と人間に関して蓄積されてきたさまざまな概念知を脱領域的に横断し、私とのふれあいに現象する。以下のレルフの言説は、図1、2に示す観光の時空間体験を余すところなく表現している。地理的空間は、人々にとって客観的なものでも中立的なものでもなく、意義に満ちている。実際の経験は、視覚、聴覚、嗅覚、現在の状況と目的、過去の経験と関係、こみあげてくる追憶、私たちが建物や景観を評価するところの多様な文化的・審美的基準、などの全体的な複合によって構成される（レルフ、1999, 60-61）。観光の知覚空間は眼前の現実から受け取る生活世界の生命的要素をはぎ取らない。観光する身体は、場の時空間を目指し、知覚し、思惟し、鑑賞し、味わい、楽しみ、驚き、あるいは祈りをとおして世界との生き生きした交信を感覚する。身体は感性を与え、感性は知覚を与え、知覚は原的情報を思惟に与える。知覚とは知覚すると思惟することにはかならない（メルロ＝ポンティ、2009, 83）。観光の世界像は感性の知覚と知性の思惟を両端とする世界像である。私が現場で表象し総合する観光の世界像は、知覚経験空間の体験情報のゲシュタルトである。

2-3. 景観と観光のパースペクティブ

場所は物理的で視覚的な形態、つまり「景観」を持つ。場所の精神はその景観にある。景観は場所の背景でも属性でもある。実体的空間は、人間がつくり出した無限の多様性をもつ建築物や街路や景観の空間という形としても経験される（レルフ、1999, 48, 85-86, 253）。京都の清水から円山公園に至る歴史的景観保全地区やローマのフォロ・ロマーノの景観は意味と歴史の縦深的多様性を与える。地理学と観光は空間領域の認識について、学術と実体験の両端からアプローチする。本項では、以下、関連領域から地理学に関心を寄せる一般読者にとっての格好の入門書として編集された、『人文地理学への招待』を参考に景観への地理学的・観光的アプローチについて論じる。

同書によれば、地理学は、全方向に向かって均質に広がる空間の概念に依拠して、人間

世界に生起するさまざまな事象を説明する。また、地理学は、歴史学とともに、地誌と歴史を統一的な視野のもとに描きだす挑戦すべき知の領域の一つである。何らかの統一性や結合の論理による空間のまとまりを見い出すことは、地理学にとって主要な関心事の一つである（竹中、2015, 2-3, 6）。

筆者はこのまとまりを観光の世界体験が与える時空間の意味と価値に見い出している。同文献は、スペインのカタルーニャ自治州がヨーロッパ景観条約の趣旨に沿って、地域計画の政策の柱の一つと制定した景観に関する画期的州法景観カタログを紹介している。カタログは、景観を人々の知覚にある自然的、人文的要素がダイナミックに作用する具体的なエリアとして理解し、一体的に捉えようとする。カタログの序文は「景観は、物理的実在であると同時に、そうした実在についてわれわれが行う表象でもある。景観は地域の形姿である。そこには、あらゆる自然的、人文的要素、そしてそれらを眺めるときに呼び覚まされる感情や感動が合わさっている。こうした多面的アプローチによって、景観が有する複合性に富んだ価値（生態的、歴史的、文化的、審美的、象徴的）の発見が可能となる」ことを示す（竹中、2015, 47）。筆者の観点からは、この定義は、図1、2に示す観光の時空間の意味と価値にはかならない。世界の景観は、われわれに複合性に富んだ意味と価値を伴う手触りやふれあい（tactile value）の観光の世界像を与える。カタルーニャの景観カタログは、感情と思考に於いて創り出された私の認識する観光の場所・景観を表現している。観光のまなざしは時空間を表象し、探索し、思索する身体のパースペクティブである。観光は人間の考える身体（感じる知性）を奪い取らない。知性と感性は世界理解の両端に位置し、経験を統合する。場所は、固有の位置や景観や人間集団によってと言うよりも、特定の状況の上に経験と意思とが焦点を結ぶことによって生まれる（レルフ、1999, 294）。身体の実験と意思は景観のうちに、観光の場所に面している私のまなざしという世界像の焦点を結ぶ。

2-4. 関連するパースペクティブ（風景哲学の視点）

以下は、風景空間を哲学の立場から論考する安彦・佐藤の言説である。両者によれば、風景とは、私たちを取り囲む場所、私たちがそこで生きる場面の具体的実質の可能的全体である。風景を眺める者は、眼前の何か一点を注視しているのではなく、むしろ空間そのものを展望して、空間全体の視覚に身を任せている。風景というものは、個々の対象の如何ではなく、諸対象の全体を包む空間が主題化されたものである。この空間は、あくまでも見る者の身体的位置という条件に即して広がる空間、その意味で現象学的空間である。

また、旅における自己と風景との出会いは、時を経て言語作品化されて風景論となる。（自己の風景論は）旅において新たな経験をした自己が、それをどう受け止め、自己自身をどう捉え直すかを確認する作業である。そこで論じられるのは、対象としての風景と言う

よりも、風景と出会った自己自身である。風景はそれを感じる人の素養や関心（知識の質）、想像力や表現力（言語表象）に依存し、そのような受容の基盤の上に文化的な事象となる。風景は、それにであう私のあり方（学者、企業人、一般生活者等の個人の素養や関心の属性）に応じて、より深くより豊かな意味を開示してくれる。風景の可能性とは、私たち自身の可能性なのである。私は身体に埋め込まれている。風景の空間は、見る者の身体的位置という条件に即して広がる空間、その意味では現象学的空間である（安彦・佐藤、2002, 6-9, 99）。

観光の時空間は身体に埋め込まれた私の視点（観光のまなざし）そのものを捉え直し、（知覚によって）先見的な概念知識を開放する。この風景の時空間において、われわれは世界と自己に出会い、思惟し、知る。観光風景の時空間は、われわれの眼前に連続して現れ、次々に展開する他者の生活世界の景観の時系列である。この時空間は、あくまでも見る者の身体的位置という条件に即して展開する。筆者の観点からは、安彦・佐藤が捉える風景は地理学が言う景観とともに観光の現象学的時空間に等しい。

第3章 観光と地理学の世界知

旅は世界に関する情報を提供するばかりでなく、旅人の自我、旅人が他者を見るとき眼鏡、前提、憶測に関する情報を提供する（リード、1993, 207）。大航海期の旅は、世界に関する情報を旅行記としてヨーロッパにもたらした。ヨーロッパにおいては、地理学の世界知は旅行記によってもたらされた。17、8世紀の旅行記は、本質的には、旅が報告するあらゆる種類の情報を編纂したものであった。エリック・リードによれば、当該時代の旅は、ヨーロッパ人が世界を調査、観察、収集するための主要な手段となる。17、8世紀には、旅行記が世界を客観的に記述するための手段、世界の在庫記録として考えられ始め、旅の記録が新しい自然科学と社会科学のための基礎資料を提供し始めている（リード、1993, 230, 243）。

広瀬によれば、18世紀前半では、専門職的な博物学者、地理学者は存在していない。海外とのつながりを持つ宣教師、商人や医学、化学分野の学者が本業に加え、博物学や地理学に関わるという状況にあった。加えて、学問的な次元に留まらず、医者や弁護士等のアマチュアの間でも海外から持ち込まれる珍しい品々を集める博物収集が広まる。時代は、学問的、かつ教養層の民衆レベルにおいて海外から集められた事物を理性の光に照らしながら、記述し理解しようとする風潮が高まっていった。18世紀半ばには、地表の状態を総合的に考察する地理学が好奇の眼差しを持って迎えられようになる。同時期以降、後半に至り、世界の地理的探検の盛り上がりと絡み合いながら、地理学は時代の最先端を行く学問として登場し、次々と大学で教えられ始める（広瀬、2017, 176-182）。旅の世界知は学術

化し、博物学や地理学に収斂していく。本章では、地理学と観光の世界知について、以下論考する。

3-1. カントの自然地理学講義

以下の論述は広瀬の著作『カントの世界市民的地理教育』を参考文献としている。カントの地理学を観光研究の観点から考察することも有意義と考え考察を試みる。本項では、旅行記がもたらす世界知および、旅行記が地理学に収斂していく過程で、カントが講義した地理学像のイメージを観光の観点から展望する。

1756年、カントは時代のうねりと時流に乗りつつ、地理学分野の適切な教科書が書かれていないとして、他の博物学者や地理学者の著作に単に依拠することなく、様々な断片的な著作や旅行記から得られた知識をもとに独自の視点で自然地理学の講義を開始している。カントの地理学は資料としての旅行記とカント自身の人間学によって講義され、世界市民的人間形成の視線を含む。広瀬によれば、われわれがある事物や事象を分類するには、概念に従うか、空間と時間に従うかのどちらかである。広瀬は、カントにおいて地理学は、世界知の統一の手段を「空間」を基にして与え、他の科学の事物を総合するものとして比類なき位置を占めていると見られると説く（184-185, 209）。

講義開始の翌1757年、聴講生募集のための広告がカントの地理学講義の内容を示している。「地球上に存在する、海、大地、山、川、大気圏、人間、動物、植物、鉱物、はすべて物理学や自然史の仕事である部門において、その完全性と哲学的な厳密性をもって考察されるのではなく、いたるところで注目すべきもの、不思議なもの、美しいものを探して拾い集め、集められた観察を比較し自らの計画を練る一人の旅行者の、そのまま健全な好奇心を持って考察する」（広瀬、2017, 186-187）内容であった。一人の旅行者の理性的で健全な好奇心とは、広瀬によれば、日常生活を脱して世界を見る好奇心である。

1772年以降、カントの地理学講義は、人間を扱う人間学と、自然地理学が両輪となって現実の世界認識が講義において探求される。広瀬によれば、カントは、地理学の教育的・人間形成論的重要性を自ら指摘する。カントの地理学の位置づけを巡っては様々な地理学者・地理学史家の見解や論考があるようであるが、広瀬は、カントの地理学は、彼の人間形成論の核心をなす世界市民的教育を体現する教育実践であり、カントの地理学はカント哲学全体を踏まえた人間教育的観点からこそ捉えられるべきとの見解を示す。旅行記をもとに世界を旅人の眼で捉え、好奇心を人間探求に託したカントの地理学教育理念の指摘である（広瀬、2017, 184-187, 195）。17、18世紀の旅行記の世界知はカントによって、世界市民形成のための人間教育の哲学的深みを備えた探求へと変容する。

世界は、私のあらゆる思惟と明瞭な知覚との自然的な場であり領野である（メルロ＝ポンティ、2009, 7）。筆者の観点からは、カントは、自らの哲学を用いて世界（人間）知を統

一する手段たる「空間」を自宅で考察するにあたり、思惟の手段として、一人の旅行者の（厳密な学としてではない）健全な好奇心が明瞭に知覚する眼（旅行記）を借りて理念的に人間形成を考察したと思える。カントの空間への眼は、観光の時空間に臨む現代の旅行者の眼（観光のまなざし）にも通底する伏流イメージをもたらしているのではないか。

カント哲学では観光概念は無縁であるが、明瞭な知覚に代わる旅行記を用いて世界と人間を理念的に思惟するカントの意識のもとに、観光のまなざしは表面化することなく潜在的に胚胎されていたかと筆者は推定する。カントは地理学を重視した。旅行記を考察するカントの眼は、ガイドブックやパンフレット等の観光情報を考察する現代の旅行者にも伏流して与えられていると考える。筆者には、カントは地理学講義をとおして自らの哲学の教育的展開を、旅行者の眼（観光のまなざし）のありかたを借りて40年に亘り育てていたのではないかと思える。カント哲学は、理念として意図した永遠平和のための人間形成の教育的意義を、旅行者の観光のまなざしに託し、旅の現場に見いだす地理学を意図していたのではないか。この観点から、筆者は、カントの自然地理学の講義意図は、歴史を超えて世界と人間理解へのアプローチに関し、現代の観光の教育的意義の探求にも課題を暗示すると考える。筆者には、地理学として講義に託されたカントの人間教育理念は、人間形成において観光の教育的意味の認識にも問いを投げかけているように思える。重複する見解であるが、観光概念は軽い概念ではない。観光概念は、カントにおいて、世界と人間についての教育的意義を託されていたのではないか。

3-2. カントの視線についての私見

広瀬によれば、カントの地理学は、歴史学でも論理学的分類でも掴み取ることができない、それは、現実的な事物や事象を考察する方図として、空間の現実の形態としての場所性を基盤に据えている。地理学は同時に生起する現象の記述である。地理学は、どこまでも現在に存在する人間や事物、そして事象をそのままに捉えようとする（広瀬、2017, 207-210）。

筆者の観点からは、同時に生起する現象を記述する場所を除いた地理学や観光は存在しない。地理学の記述と観光情報はともに地理的地球世界の事物や事象を対象とし捉えようとする。前者は現象を空間の現実形態として学術的に記述し、後者は現象の時空間を観光ガイドブックやパンフレット、あるいは行政ホームページの情報として表現する。旅行者が身を置く現場で同時に生起する現象世界の記述は、いま、ここで現象する他者の生活世界をその場で表象し、思惟し、理解しようとする旅行者の知覚表象に通底する。観光する1人の旅行者の眼は、厳密な学的探求眼ではなくとも知覚世界を解釈、了解する自らの観察視点を持つ。旅行者は、地理的地球世界の場所の時空間に含まれるいっさいの現実に面する。その好奇心は、場所の空間に即し、現実を知ろうとする。広瀬によれば、カントの

講義内容は、弟子のリンク編集の『自然地理学』と受講学生のノートが残っているが、詳細研究は端緒についたばかりの状況にある。カントが講義した地理学とは、如何なる世界知の認識を目指していたのであろうか。1人の旅行者の好奇心に映る世界を世界市民の人間形成を意図して講義するテキスト（講義内容）とは如何なる知見の編集がなされていたのであろうか。筆者の観点では、現代の観光ガイドブックやパンフレット等の観光情報は、17、18世紀の旅行記の機能を受け継いでいる。現代の観光情報は当時の旅行記の子孫である。旅行記は地理学の学術記述に転身した。一方、観光情報は学的完全性と厳密性を備えないが、歴史的、文化的かつ現実的な事物・事象について1人の旅行者の肉眼に引き継がれている。現実の形態としての場所性を基盤に据える地理学と観光の視線は共に、さまざまな知と情報を空間（景観・風景）に総合する。

3-3. 地理学知と観光情報の関連的展開

生きられた世界とその地理学は、反駁の余地のないほど奥深い人間性と意味に富むものとして把握される（レルフ、1999, 38）生きられた生活世界の地理学的な場所（景観・風景）は、旅行者の思惟と明瞭な（生き生きした）知覚が焦点を結ぶ観光の世界知の生成臨界地である。空間の世界知においては概念知と感性知は分かちがたく結びつく。重複して述べるが、地理学と観光は同じ空間（景観・風景）認識の両端に位置し、その知見は地理学では学的に与えられ、観光ではガイドブックやパンフレット等の形態の観光情報として提供される。筆者は、地理学の時空間、場所、景観等の概念は観光の時空間概念と同根し、含意していると考える。筆者の観点では、観光情報は放置された地理学的教材と映る。近代の旅行記の世界知は、地理学知見の母体として展開した。現代の観光ガイドブックや観光パンフレットあるいは行政のホームページの観光情報は、地理学の学的言説の手前で提供される生きた世界説明であると考え。観光情報の世界知はわれわれの世界理解について客観知と主観知を橋渡しする接点の機能を有している。その意味で、観光情報は世界理解の情報資源として見直されるべきと指摘したい。筆者は、観光情報は、学的には放置されているが、世界経験知の最も身近な教材、教育情報資源の側面を潜在的に持つと考える。

第4章 観光情報の意味（意義）と価値

真正の知覚においては、意識は外からやってくるのではなくて、感性的なもののなかで生まれる。科学のなかに私を閉じ込めることはできない。世界についての私の知識は、たとえ科学による知識であろうと、どれもこれも、世界に関する私自身の観察、もしくは経験から得られる（メルロ＝ポンティ、2009, 4, 56）。世界の中の物体や形状（事物・事象）は、その意味において体験されるべきなのであり、意味と切り離すことはできない（レル

フ、1999, 113)。地理学の空間は、あらゆる教科の知見を総合するが、広瀬によれば、現代では地理教育的な人間形成は教育哲学・人間形成論的考察の研究では扱われていない（広瀬まえがき ii、iii）。筆者は、観光情報の知見は人間形成論に於いても地理学とともに空間を介し、研究アプローチの両端に位置すると考える。一般論として、観光ガイドブックや観光パンフレット、自治体のホームページの観光情報は、学問とは程遠い地域説明資料と捉えられている。筆者の観点はこれと異なる。観光情報の形態やコンテンツこそ、諸学の概念が果たし得ない生きた世界と人間の理解を与え、世界に関する私自身の観察、経験に与えるさまざまな情報知の原資であると考え。観光情報は、世界と人間を知覚に引き寄せ、自己形成に活かそうとするテキストとしても機能し得る。本章においては観光情報の観点から、観光の知見の教育的意味（意義）と価値について考察する。

4-1. 観光情報

齋藤・竹中は、景観カタログが大衆的な基盤を持つ旅行ガイド、絵葉書、古写真など、多種多様な（情報）形態が、人々が景観を共有するためのメディアとして機能することに注目し指摘している（竹中、2015, 55）。観光情報の形態とコンテンツのバリエーションは、自然的要素と人間の歴史文化的要素を分け隔てずに捉え、景観を捉えるメディアとして、さまざまに語る時空間の知覚情報の有機的ゲシュタルトである。レルフが指摘する通り、場所の全体像は形式的に定義され、細分化される学問分野には入りきれない。土地の上に展開する人間の営みという視点は地理学における景観研究の大きな課題にも重なる。地理学は景観を観る人々の主観の問題にも踏み込まざるを得ない。人間によって、知覚され、意識構造に取り込まれることによって、さまざまな意味や価値を与えられるのが現実の景観のあり方ではないか（齋藤・竹中、2015, 48）。

我が国の観光情報の形態とコンテンツは、景観の現実のあり方の渾然一体的・有機的全体の意味と価値を多種多様に語ろうとする実践的メディアであると筆者は考える。地理学と観光の情報は現実の世界（景観）知の両端において機能を分担している。観光情報は、経験する人間の意識に根ざした場所や景観を複合的に語り、体験させる。筆者の観点からは、観光情報は、諸学の知見をわかりやすく開示し、パンフレット等観光情報は、学的言語では語り得ない世界記述の優れたメディアとして教材を提供する。筆者は、観光情報は最も身近な世界説明の実践的メディアであると捉える。地理学の世界知は教科として教育に供されるが、筆者の眼には観光情報は放置された教材と映る。観光情報を世界のより良い理解ツール、メディアとして教育に還元活用する視点が必要と考える。カントは地表の上に展開する人間の営みを自らの哲学に引き寄せ、旅行記を手引として、景観カタログの視点で考察していたのではないか。筆者は、現代の観光情報は、カントが教材とした旅行記に通じる教育メディア価値を潜在させていると考える。

4-2. 観光情報の教育展開

知覚とは知覚すると思惟することに他ならない。世界の本質を探究することは、いったんそれを論議の主題にしてしまった後で、観念としてどのようにあるかを訊ねることではない。世界は私が思惟するものではなくて、生きるものである（メルロ＝ポンティ、2009, 16, 18）。カントは、事実としての世界の理解を実体験ではなく他者の旅行記体験に求め、観念として探究した。現代のパンフレット等観光情報は、行政機関、旅行業界、出版業界、郷土博物館等の研究機関等によって文字通り多種多様に紹介されている。これら観光情報は、厳密な学的世界説明としてではないが、世界が我々の経験にどのように与えられているかを説明する。観光情報は、カントの聴講生募集広告に見られる項目を詳細にカバーし、その内容は郷土博物館の学芸員等の研究成果を反映することから教材としての価値を失わない。

筆者は世界知情報の形態として、観光パンフレットや行政の観光ホームページ等に見られる身近な観光情報の教育活用と、政策展開の工夫が必要ではないかと考えている。観光情報の教育的価値は放置されてはならない。観光情報は、カタルーニャの景観カタログが語るとおり、地域政策の対象としても重要である。観光情報はマーケティング使用のみならず、教育の基盤としての世界（地域）説明を担っている。観光基本法や行政は観光政策として地域単位の大小に関わらず住民の郷土愛と地域理解を求める。観光情報は地域の郷土理解、郷土知に関わる最も身近な教材として住民に還元され、義務教育を始め生涯教育一般にも活用されるべきと考える。観光の世界知は世界・人間に関し、知性と感性とともに感受される。観光情報の知見は万人の身近な教材である。

竹中は、環境問題等、地理学が果たしうる役割に関し、尺度を距離や面積で定義される抽象的な空間に置く限り、（地理学が）示しうる政策提案の選択肢は限られていると述べる。また、なおざりにされがちな自然・人文の接点領域を指摘した上で、景観の中に身をおいて人間の身体感覚と結ばれた空間を捉える古典的な地理学研究の意義を見直す必要があることを指摘する（竹中、2015, 7）。筆者の観点からはこの見直しの接点領域は観光が参加し得る領域と思われる。地理学は政策提案の選択肢として観光情報の教育展開を考慮すべきと考える。われわれの思惟の全体を包括する思惟などありはしない（メルロ＝ポンティ、2009, 13）。どのような知識も断片にすぎない（広瀬、2017, 303）。世界と人間の理解は概念知と体験知の両端を必要とする。観光情報は断片するが、個々のコンテンツは具体的かつ豊かである。筆者は、観光情報はむしろ断片化することによって、一般化された客観概念知が開示しないわれわれにとっての自己と世界了解を与える詳細知見を万人にもたらしていると考える。

域を捉え、思惟・行為する場所として地図上に表現する。図4は、統一テーマの焦点事例を家康に関連する時空間に置き、関ヶ原を起点とし、彦根城に至る街道に図3交点の観光情報をわかりやすく編集・配置して歴史的景観を解説している。番号は関連する資料を示す。



図4 街道をメディアとして家康に関連する地誌・歴史(図3事例)を地図上に配置

図3、4が事例的に示すとおり街道は、点的場所の観光情報メディア系列を担い、体験に導く交通メディアとして機能する。観光情報の空間は、知覚体験する地域の意味と価値を担い多様なテーマに統一する。観光情報は地域説明・学習の実践的手段として地理学(とりわけ地図)や歴史学とのコラボによる教育的教材としても編集・活用され得る。筆者は、観光情報は、教育学の観点からもその意義を捉えられるべきと考える。

終わりに

人間は言語や法則によって世界を分節し説明する。現代人は自然、歴史、人文各領域に関わる情報の洪水の中に暮らしている。言語や科学法則がもたらし、築かれてきた世界知の地平の広がりとはことばの世界説明のストックは既に膨大な量に達している。世界は概念や氾濫する情報によって重ね着し厚着している。科学技術の発展により、自然、歴史社会、政治経済は客観化され、概念化世界説明を限りなく生産するが、人間が蓄積し過剰供給してきた抽象化知識の総量は、個人の日常生活にとっては最早直接的な関わりを持たない。一方、あらゆる場面で世界化する現代社会において、日々の人生を実践するわれわれは、必要有用な私にとっての世界知を自ら必要とする。抽象的世界知は個々の人生の実践を語ら

ない。無秩序、無批判に取り込まれる情報は自己を漂流させる。

木田は以下を問いかける。相互に孤立した知識や情報の散乱するなかで、ほとんど己を見失っているわれわれは、それらの知識や情報がわれわれの経験の中で如何に接合し合い、如何なる意味を有するかを根本から検討し直す必要があるのではないだろうか。個々の学問の狭隘な方法的原則を超えて、それら諸科学の成果を、我々の生きた経験の全体のうちに位置づけなおしてその意味を問う必要があるであろう。抽象的な概念の操作に終わるのではなく、それらの概念の意味や価値、その結合の可否を、われわれの生きた経験に問うこと、端的に言ってこれが現象学的態度なのである。現象学は、決して職業的な哲学研究者の占有物ではありえない。みずから現象学的態度で事象に立ち向かうことを学ぶべきである（木田、1970, 200-203）。

観光経験は万人に開かれている。観光の世界知は、世界を抽象的に理解するのではなく、われわれの生きた経験に与えられる世界像を取り戻し、世界を学び直すわれわれ自身にとっての現象学の実践ではないか。世界はわれわれに知覚情報として現象し、あるがままの世界の現存を示す。観光の世界像は抽象化される概念世界知の意味や価値を自らの生きた世界経験に問おうとする手段を含意している。

教育哲学・人間形成論的考察の研究において、地理的営みや地理教育が主題的に論じられたことは今までなかった（広瀬）。カントが自らの地理学講義に求めた1人の旅行者の健全な好奇心が意味するものは何か。古人の跡を求めず、古人の求めしものを求めよ（芭蕉）。筆者にはカントは地理教育を通して観光が人間形成に与える教育的側面を見ていたのではないかとも思える。われわれの世界経験は意味の総体を含む（木田、197）。教育は学意味の総体を含み、観光は経験の総体を含むが、観光教育が教育哲学・人間形成論的考察の研究において主題的に論じられることは地理学同様、ない。教育における観光研究の潜在的重要性を指摘しておきたい。観光経験は万人の現象学が与える自己教育の実践である。観光概念に投げかける地理学・教育学の眼が望まれる。

注

- 1) 本稿においては経験を一般的抽象概念、体験を私の実存的知覚経験として区別して用いることとする。
- 2) 図3、図4は滋賀県NPO法人歴史資源開発機構の首席研究員・大沼芳幸氏の全面的知見と協力のもとに作成した資料の一部である。事例図においては、滋賀県湖北地域の空間を統一するテーマを戦国期・家康にフォーカスしている。観光情報の体験消費は現場においてなされる。地図上の番号は、戦国期と家康に関する情報を現場に即して表現する。湖国の変遷は街道に物語として刻みこまれ、豊かなコンテンツは沿線に有形無形に点在する。県下街道は地誌のコンテンツを担い、現場に導く動的観光（情報）メディアと捉えることができる。車はやがて自走するコンピュータ端末として大変化を遂げ、新しいモビリティ文化をもたらす。地域の観光コンテンツのデータ化と車のAI化は、走行現場の観光解説や地域理解の適切なナビゲーションを可能

とする知見を提供する。プログラムに地理学や観光情報が加えられることに疑問の余地はない。地理学と観光情報のコラボによる次世代ガイドブック（地域地理・観光データのデジタルアーカイブ化、アプリ、カーナビ加工等への設計）は生きた地域学習の実習教材としても機能し得る。地域（世界）の空間は人間形成の基盤をなす。学校教育を始め観光情報の多面的展開を意識した地域教育政策が望まれる。

参考文献

- 安彦一恵・佐藤邦泰（2002）、『風景の哲学』ナカニシヤ出版。
- イーファー・トゥアン（1993）、山本浩訳『空間の経験』筑摩書房。
- 梅棹忠夫（1993）、『梅棹忠夫著作集第14巻』——情報と文明』中央公論社。
- 植村玄輝・八重樫徹・吉川孝・富山豊・森功次（2017）、『現代現象学』新曜社。
- エリック・リード（1993）、伊藤誓訳『旅の思想史』——ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』法政大学出版局。
- エドワード・レルフ（1999）、高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学』——没場所性を超えて』筑摩書房。
- 木田元（1970）、『現象学』岩波書店。
- 小林道夫（1986）、『科学の世界と心の哲学』——心は科学で解明できるか』中央公論新社。
- 竹中克行（2015）、『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房。
- 鳥尾克二（2015）、『観光とその産業の理論的認識アプローチ』、(2018-2023),『観光と観光産業の情報論的研究、補論』、『観光の原理的研究、補論 1, 2, 3』、日本国際観光学会論文集、自由論集。
- 広瀬悠三（2017）、『カントの世界市民的地理教育』——人間形成論的意義の解明』ミネルヴァ書房。
- メルロ＝ポンティ（2009）、中島盛夫訳『知覚の現象学』法政大学出版局。
- メルロ＝ポンティ（1988）、加賀野井秀一訳『知覚の本性』法政大学出版局。
- 山本昭二（1999）、『サービス・クオリティ』——サービス品質の評価過程』千倉書房。

（とりお かつじ／京都大学大学院教育学研究科・元研究生）

The Importance of Empirical Knowledge of Tourism in the Context of Education and its Value Reconsidered

—— Place, Space-Time, and Information ——

Katsuji TORIO

Humans use language and theory to explain the world. The horizon of world knowledge that has been brought about and built by language and scientific laws, is overflowing, and we even feel stifled by the abundance of words that explains the world.

The world is layered with concepts and various types of information. The total amount of abstract knowledge that humans have accumulated and oversupplied no longer has any direct bearing on their daily lives. However, in a modern society that has become globalised in every aspect, those who live their daily lives need world knowledge that is necessary and useful. Tourism is a direct perceptual experience of the geographical world. This experience is open to everyone. It seems reasonable to suppose that the world image of tourism implies a means of questioning the meaning and value of the abstract concept of world knowledge in one's own life. We can say with some certainty that geographical activities and education have never been discussed as themes in research on educational philosophy and human development theory. Tourism research has also never been discussed in the context of educational philosophy and human development theory. Needless to say, geographical and tourism knowledge are closely related as a means of understanding the world and humans. The essence of tourism is a first-person, subjective experience of the world. Through tourism, people re-learn the world. This paper examines the educational aspects of tourism knowledge and information.